

## 息子でなく母親が遺産相続する時

### 『デイヴィッド・コパフィールド』における父権の変容について

松村 豊子

#### 1. 継父登場の背景

1840年代後半に出版されたイギリス小説の特徴の一つは、ヒロインないしヒーローの再婚であろう。ディケンズの『ドンビー父子』（1846-48）におけるドンビー、サッカレーの『虚栄の市』（1847-48）におけるアミーリア、シャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』（1847）におけるロチェスター、そして、アン・ブロンテの『ワイルドフェル・ホールの住民』（1847）におけるヘレン等々。彼らの再婚は例外なく家庭生活を質的に改善し、家庭生活の中心を横暴で支配的な夫（父親・息子）から道徳的で家事能力のある妻（母親・娘）へ移行させている。これらの小説とほぼ同時期に出版された、イギリス教養小説の代表作の一つであるディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』（1849-50）をヒーローの結婚・再婚という視点から読むと、家庭生活の中心が男性から女性へ移行する背景の一つとして、親から子へ継承されるものが血筋・資産よりもむしろ性役割等々の日常生活に深く根差した家庭生活のパターンであることが明らかとなる。この作品では大部分の家族が父母のいずれか一方が欠けたいわゆる欠損家族として紹介される。ディケンズは敢えて父母子という三者の力の均衡がくずれた欠損家族を設定し、父権の所在の不確かさ、また、それに伴う親子の強すぎる情緒的絆（時として病的な癒着関係にまで発展する）を明確にしている。

父子の対立・離反の構図は主人公の幼年期から青年期にかけての精神的成長過程を主題とする教養小説には欠かせない常套手段である。『デイヴィッド・コパフィールド』ではこの対立の輪郭は曖昧である。デイヴィッドの父親は彼の誕生以前にすでに亡くなり、彼の母親はその後再婚する。しかも、彼女もまた再婚後1年あまりで死亡する。彼女の死後、継父マードストーンはその後家屋敷を売り払い、デイヴィッドをロンドンの工場へ徒弟として追い払う。つまり、デイヴィッドは10才にして父母を亡くすと同時に、社会的地位を失い、寄宿学校で悠然と紳士教育を受ける身分から、自活を余儀なく強いられる勤労少年になる。この少年時代の屈辱・苦悶は、デイヴィッドが作家として大成した後も「筆舌に尽くし難い」ほど深い傷を心に残す。しかし、奇妙なことに、彼の怒りの矛先は終始継父に向けられるだけで、実父母の愚かさ、つまり、子供の将来の幸福を考慮できない無分別・無責任さに向けられることはない。

実父は歳が彼の半分ほどしかない、若く美しく優しいが、世事に疎く、家事及び資産運用能

力もない、無一文のガヴァネスと結婚し、しかも、生まれてくる子供の財産権を確保することなく、未熟な妻に全財産を譲渡したまま亡くなる。そして、残された母親もまた再婚前に息子への財産分与を法的に確保しないまま再婚し、亡くなる。再婚するにあたって、彼女が相手の男性が彼女自身だけでなく息子の保護者としても適任かどうかを考慮しないことは言うまでもない。成人したデイヴィッドは継父の言動を責めるだけでなく、彼の法的社会的権利を剥奪する結果に終る実父母の愚行を明らかにし、父権制社会における父親の責任の所在を問うべきなのだが、彼は実父母を全く非難しない。デイヴィッドに代わって、彼らを非難するのは、父方の大祖母ベッシー・トロットウッドである。もっとも、彼女の非難の声は、甥夫婦の無分別を償う彼女の行為（孤児となったデイヴィッドを私的に「養子」とし、彼を愛し、保護・教育する）によってほとんど消えるのだが。

では、何故デイヴィッドは自らを社会的アイデンティティの危機にまで追いつめる実父の愚行を怨まず、継父に対する嫉妬・憎悪のみを語るのか。息子以外の男性が妻の愛情と財産を横取りするのを可能にした父親に責任はないのであろうか。ディケンズがこの問題に対してどのように考えていたかを知る手がかりの一つは前作『ドンビー父子』に求められるだろう。

ディケンズは『ドンビー父子』において家族法の改正（遺言法の制定による世襲制の廃止など）に伴う法的社会的父親支配の終焉と、父母子（特に娘を中心にした）の情緒的絆を介重視した家族形態を提唱している。勿論、父親から息子への資産と権威の継承を軸とする家族形態から娘中心の情緒的な家族形態への移行には「無垢な子供時代」の発見が必要なわけである。ディケンズは子供時代の喪失を夭折するポール・ドンビー、支配的な夫ドンビーの元から出奔するイーディス・ドンビーはじめ多くの登場人物によって嘆かせ、個人の成長過程における子供時代の重要性、子供に対する親の保護・養育義務を力説している。ディケンズは『ドンビー父子』では明らかに一族一家の繁栄を目指す親でなく家族の感情的な繋がりを求める子供の立場にたっているので、ここでは子供の反抗は罰せられるよりもむしろ奨励されている。しかし、『デイヴィッド・コパフィールド』では、世襲制の廃止により、夫が息子でなく妻に財産を譲渡できるようになった結果、息子と継父が彼女の愛情と財産の獲得をめぐる争い。ここでは父子は社会的に対等とみなされ、子供も親に対する反抗の責任を負う。例えば、マードストーンが反抗的なデイヴィッドを執拗に鞭打った時、これに逆上したデイヴィッドは継父の二の腕に噛み付き、罰として、母親の元から寄宿学校へ放逐される。自立心に富んだ子供ならば、ジェイン・エアでなくともこの反抗を「誇り」と記すだろう。ところだが、デイヴィッドはこれを「恥」とみなし、その後、劣等感を克服し、心の傷を癒すために、父親の権威を具現していると思われる年上の男性の庇護を求めて放浪する。母親（この場合、子供に対する愛情と教育の

提供者)の不在はベッシー・トロットウッドによって容易に埋められるが、父親の不在は最終的にデイヴィッド自身が母親と同じ「幼い妻」と結婚し、父母の結婚生活を追体験するまで埋まらない。ミス・トロットウッドはデイヴィッドを実質上「養子」とし、彼をトロットウッドと新たに命名するが、デイヴィッドは法律上はデイヴィッド・コパフィールドの名のままである。

アニー・サドランはディケンズの物語の基軸には親から子への名前と財産の継承があるというが[サドラン、8]、本作品では父親から息子へ直接継承されるものは財産でなく、家族の情緒的な絆になっている。この作品を分岐点として、子供(特に息子)による遺産相続放棄がディケンズ小説の主要テーマの一つになることは興味深い。「子供」という言葉は、デイヴィッドが遵守する自助の精神(1860年代にS.スマイルズが広く提唱することになる、個人の能力・努力を重視した立身出世の哲学)と対比され、責任回避という否定的な意味で使われることが多い。自ら「子供」であることを豪語するミコーバーの経済観念のなさ・無責任さは、この典型的な例である。デイヴィッドは実父の遺産をあてにし、彼の言動の是非を問う以前に、自助自立の精神に則り、継父の姿を反面教師とし、自ら父親になることを運命づけられたヒーローである。

デイヴィッドの物語の大枠は、本作品の正式表題『デイヴィッド・コパフィールド・ジュニアの歴史と経験』が示唆するように、「父の息子」として父親と同じように家事能力が欠落した「幼い妻」ドーラと結婚し、父母の結婚を追体験することである。しかし、彼は父親と違い、妻より長生きする。様々な愚行によって、家庭を度々混乱に陥れた妻が流産の末、亡くなると、彼は大伯母のお気に入りである、家事能力に選れ、かつ、精神的な支えとさえなるアグネスと再婚する。19世紀の小説における愛情表現に注目するピーター・ゲイは本作品を最も愛情豊かな小説と呼び、デイヴィッドが母親から恋人・妻へ、そして、最初の妻から二度目の妻へ愛情を転移することで、オイディプス・コンプレックスを見事に克服していると言う[ゲイ、184]が、まさに彼の指摘どおりであろう。夫の精神的ささえとなり、愚痴一つこぼさず家庭の平和を守るアグネスに、肉体がない「家庭の天使」のレッテルが貼られてから久しい。しかし、本作品では父親から息子が継承するものが名前と曖昧模糊とした感情の絆だけとなり、息子が単独で父権の権威を明らかにしなければならない。亡くなった母親に代わって父親に忠義を尽くすアグネス(彼女とドーラは共に父子家庭で育つ)は、デイヴィッドの自己確立には欠かせない存在なのである。孤児であるデイヴィッドが長年探求する父権の権威は、もはや妻の姿なくして確認できないほど弱く曖昧なのである。

## 2. 妻たちの奇妙な共存関係

デイヴィッドの二人の妻、ドーラとアグネスの関係について興味深いことは、二人の間に反目・敵意といった不協和音が一切ないことである。ドーラは「兄妹」のようなデイヴィッドとアグネスの深い信頼関係に嫉妬することはない。彼女はデイヴィッドとの結婚式でアグネスの手をしっかりと握り、結婚後は家事についてのアドバイスをアグネスから仰ぎ、また、臨終の床ではアグネスにデイヴィッドの妻の座を託し、デイヴィッドでなくアグネスに看取られながら息を引き取る。他方、アグネスはデイヴィッドにプロポーズされるまで、彼の賢い「姉妹」として、ドーラだけでなくデイヴィッドにも助言助力を惜しまず、決して彼に対する恋心をあからさまに表したり、嫉妬したり、デイヴィッドを詰ることはない。そして、デイヴィッドがアグネスの献身・忠誠を疑うこともない。ディケンズは妻たちのこのような平和的な関係を読者に念押しかのように、デイヴィッドに彼とアグネスとの間に生まれた三人の娘にそれぞれアグネス、ベッシー・トロットウッド、ドーラと名付けさせる。

ところで、妻が法律的には夫の所有物とされた時代の作品では、二人の妻は一般的にはジェイン・エアとバーサのように「聖女」と「魔女」といった女性の対極的な資質を表し、両者の平和的の友好関係が描かれることはめずらしいのではないだろうか。夫と彼の二人の妻という人間関係は母親の愛情と財産の獲得をめぐるデイヴィッドとマードストーンの争いの逆バージョンになる場合が多いように思われる。『デイヴィッド・コパフィールド』の出版からほぼ10年後の1860年代前半に人気を博したセンセーション小説では、女性が男性の欲望の対象であるばかりでなく、自ら欲望の主体になり、妻たちの競合が主要テーマの一つになる。例えば、二人の妻という視点から『イースト・リン』（1861）を読むと、これは『デイヴィッド・コパフィールド』に対する強烈なパロディとなる。この作品では、ヒーローは二人の妻を同等に愛する、家庭の平和を守る誠実な男性だが、知らず知らずのうちに二人と同じ家に同居するはめに陥る。実は、死んだと思われていた先妻は生きており、しかも、後妻による継子いじめを止めるために元の家庭にガヴァネスとして戻る。この小説は筋立ての論理的一貫性に欠け、文学作品としては論じる価値があるかどうか疑わしいのだが、母性という共同幻想の名の元に女性たちが自我をぶつけ合い、夫の家長としての権威を意図せず地に落とす物語の例としては非常におもしろい物語である。

では、『デイヴィッド・コパフィールド』では何故ドーラとアグネスはデイヴィッドの結婚生活に不和和音を醸し出さないのか。理由は三つ考えられるが、その一つは繰り返すまでもなく、彼女たちがデイヴィッドの語りの客体、つまり、曖昧になった父権の権威を発見・確認する主要な道具立ての一つに還元されていることである。もう一つの理由は彼女たちの不平不満の声をデイヴィッドを「養子」とするミス・トロットウッドが解消しているのである。彼女がア

グネスの父親ウィックフィールドに顧問弁護士として資産の運用を任せていた関係上、彼女とアグネスの付き合いはデイヴィッドとの付き合いより時間的には長く、アグネスが亡き母親代わりに精神的肉体的に衰えていく父親の世話をする労苦を熟知している。ウィックフィールドは一人身の侘しさを慰めるためにワインを飲み始めるが、次第にワイン摂取量が増えるのと比例して、使用人ヒープに任せる仕事量も増える。そして、遂にはヒープの術中にはまり、公金横領の汚名を着せられたうえ、仕事だけでなく家屋敷・娘までもヒープに奪われそうになる。アグネスの父親に対する変らない愛情と献身を考えると、ミス・トロットウッドが密かにデイヴィッドとアグネスの結婚を望むもの当然であろう。しかし、彼女はデイヴィッドの意志と幸福を最優先するので、彼が彼女に相談なくドーラとの結婚を決めると、彼の洞察力のなさを「見てない」と一言嘆くだけで、彼とドーラとの結婚を支援する。そして、家事に無能なドーラを矯正しようとするデイヴィッドがミス・トロットウッドに同居と手助けを望むと、彼女はこれを断固断り、逆にデイヴィッドの短気と身勝手さを諷める。彼女はデイヴィッドが結婚前にしていたように、ドーラを「かわいいお花ちゃん」と呼び、彼女が好きそうな小物を買って与え、あるがままの彼女を受け入れる。マードストーンは「幼い妻」を矯正しようとし、彼女を間接的に死亡させるが、デイヴィッドが彼の運命を回避できたのは、デイヴィッドの忍耐と愛情が前者のそれに優っていただけでなく、ミス・トロットウッドの知恵と愛情という支えがあったことである。デイヴィッドとの結婚を密かに望んでいたのがアグネスでなくミス・トロットウッドであり、また、ドーラを無能で美しいが故に慈しむもデイヴィッドでなくミス・トロットウッドであることを考えると、デイヴィッドの愛情獲得をめぐる二人の妻たち間の感情の纏れが皆無なのも当然である。二人の妻に対するミス・トロットウッドの態度がいかにデイヴィッドの個人的幸福に貢献しているかは、彼女と似たような状況に設定される『イースト・リン』のミス・カーライルの嫉妬・一族一家の繁栄を望む野心と比較するとより明白になる。

ミス・トロットウッドは一見すると、恋愛感情とは無縁の風変わりな男勝りな男嫌いの独身女性である。実際、彼女がかつてデイヴィッドの母親の無能さを軽蔑し、彼女が生んだ子供が男子だと知ると、デイヴィッド母子と絶縁する。しかし、この「不愛想で、魅力のない」姿勢は彼女の「涙」を隠すマスクでしかない。彼女はミス・トロットウッドと自称し、独身であるようにみせかけているが、実は彼女には別居中の夫がいる。二人は若い時に恋愛結婚したらしいのだが、その後、夫がギャンブルにアルコールに女性にと放蕩の限りを尽くし、拳げ句に彼女の財産を散財した結果、二人は私的に協議別居している。彼女がデイヴィッドを養子とした頃には、二人の関係は夫が借金の返済に困った時に彼女の元を密かに訪れる程度である。「結婚した頃は見栄えのいい男で、馬鹿なことに、わたしは彼が名誉を重んじる人だと信じていました。

今でも、彼が罪に問われて刑罰をうけるよりも、わたしは喜んで彼にお金を渡しますよ。実際、この国をうろついていれば、いつかそうなったでしょうね。(中略)これがわたしのおもしろくもおかしくもない話です。」(635) 彼女は夫の死に水をとった後、このように淡々と夫に対する思いをデイヴィッドに語り、たとえ別居はしても、夫婦の絆は断ち切れないということであろう。ディケンズはデイヴィッドの二人の妻の反目・対立感情を鎮める女性経験の語り手としてミス・トロットウッドを非常に効果的に設定している。

二人の妻が反目しない第三の理由は、デイヴィッドが二人の性格付けから家庭の平和を破壊するほどの性的魅力を排除していることである。彼はドーラを亡き母親に、そして、アグネスを教会のステンドグラスに描かれた聖母と同一視する一方、初恋の相手エミリを男性の快楽・欲望の対象とし、彼女の婚約者及び誘惑者双方の家庭を崩壊させている。父親の保護監督下におかれるドーラやアグネスと違い、エミリは孤児であり、しかも、貧しい労働者階級の出であるため、誘惑の要因にも誘惑の犠牲にも容易になれる状況下にいる。ここで興味深いことは、ディケンズがデイヴィッドの誘惑願望を極めて巧妙に表していることである。ドーラと結婚し、一家の主となるために懸命に働かなければならない(仕事を掛け持ちしているため、彼は朝五時に起床し、夜更けまで働く)デイヴィッドにエミリを誘惑する余裕は経済的にも時間的にも心理的にもない。と、デイヴィッドは語るのだが、誘惑者がデイヴィッドが青少年時代に常に慕い、庇護を求める、年上の同窓生スティアフォース(父親亡き後、金持ちの母親に溺愛されて育ったダンディ)であることから推すと、デイヴィッドはスティアフォースに彼自身には実現できない無軌道な欲望を見出していると言えよう。

ディケンズが当時の定説にならい、女性の性が売買可能な、家庭の平和を崩壊する主要因とみなされていたことは周知のことだが、エミリの誘惑劇は皮肉なことに家庭の平和が魅力に乏しい社会的安全弁にすぎないことを暗示している。家庭の平和と家庭崩壊との境界線は、父権の権威確立を志すデイヴィッドの道義心である。しかし、スティアフォースをめぐるエミリとローザ・ダートル(かつて彼に恋し捨てられた孤児で、スティアフォース家の遠縁の娘)との激しい反目・対立感情とドーラとアグネスの相互補助的な友愛感情とを比較すると、明らかに前者の方が読み応えがある。そして、ドーラとの結婚生活を回顧するデイヴィッドが「心の空白」を告白する時、読者は彼とアグネスとの結婚の幸福度もも疑問視せざるをえない。「わたしはずっとあなた方二人の間に置かれた、目も耳も感情も思い出もない歪んだ家具の一つにすぎなかったのよ」(736)というローラの怒りの言葉は、テキストが沈黙を強いるドーラあるいはアグネスの声の反響となるべきだったのではないだろうか。

A・ウェルシュは「疲れた旅人」デイヴィッドに静かで平和な「避難所」を提供するアグネスを

「死の天使」と言うが[ウェルシュ、181]、スティアフォースに対するデイヴィッドの強い憧憬と愛着は、確かに、外界の喧騒を遮断した家庭に対する彼の満足度を減らしている。

今日のように文明化した状態では、個人は要求に応じて幸福追求の科学的な手段を入手できるので、家庭という概念はすたれるべきである。家庭は野蛮な概念であり、原始時代にとられた方法である。家庭は外界を疎外する故に、反社会的である。我々が必要とするのはコミュニティである[ディズレイリ、193]。

これはディズレイリの『シビル』（1845）からの引用である。当時、女性のための手引書が巷に氾濫していたことからわかるように、時代の主流は家庭を崇拜し、家庭の平和を推奨したが、しかし、その一方ではディズレイリのように家庭の社会的機能のマイナス面を指摘する声もあった。ディケンズはこのマイナス面を熟知したうえで、『デイヴィッド・コパフィールド』において家庭の平和を称えている。

### 3. 父権の権威の拡散

デイヴィッドは主として円満な結婚生活という形で父権の権威を提示しているが、この作品では女性の道徳的墮落を媒体にした別の方法が幾つか示唆されている。次の二点を指摘し、本稿のまとめとしたい。

一つは失踪した娘を捜索追跡することである。追跡する者に時間的・経済的・心理的な余裕がなければ、また、社会的信用がなければ、失踪した家族を探し出し、連れ戻すことができないことは、オースティンの『高慢と偏見』（1813）で駆け落ちしたベネット家の娘を追跡・奪回するのが彼女の父親ベネットでなく、彼よりもはるかに経済力があり、社会的信用も篤い娘婿の一人ダーシーである例を挙げるまでもなく明らかだろう。ディケンズの作品では、この追跡は探偵・警察という制度化された権威筋に任されることが多い。失踪したレディ・デッドロックを追跡するバケット警部を引用するまでもなく、次作『荒涼館』（1852—53）以降、この傾向は特に顕著である。しかし、『デイヴィッド・コパフィールド』ではエミリの叔父ペゴティは官憲の助けを借りず、単独でエミリの行方を追う。彼はスティアフォースに誘惑され捨てられたエミリが生活苦・孤独感から売春婦に身を落とすのを防ぐために、彼女を連れ戻し、社会復帰させる。つまり、追跡の結果、彼は父権の権威を社会的に認めさせている。これ以前の二人の関係は非常に不安定で、それぞれ「父親」と「娘」の役割を果たす、同居する独身の叔父と独身の姪（叔父と姪の結婚が法律で認可されるようになるのは、第一次世界大戦後である）

であった。ところが、この追跡・奪回は彼を「娘」の危険な性を監視・監督する「父親」とし、二人の関係を「正常化」する。但し、ディケンズがこの父権の提示方法の有効性をどの程度信じていたかは疑問である。何故なら、ディケンズは再会した二人をオーストラリアへ移民させ、デイヴィッドのテキストから抹消するだけでなく、ペゴティの女性バージョンを提示しているから。ディケンズが主宰する週間雑誌『ハウスホールド・ワーズ』の創刊号には、エミリと同じ境遇にある娘を捜索追跡する母親の姿を描いたギヤスケル夫人の『リジー・リー』（1850）が掲載される。娘の失踪・墮落は「家族の恥」つまり父権の権威の失墜の結果に他ならず、娘の捜索・奪回は、結局、弱体化した父権の表明でしかないということであろう。

もう一つの方法は、夫の友人知人が彼の妻の言動を見張り、その道徳的是非を問う姿勢である。ストロングは年輩の学者で、デイヴィッドの恩師であり、かつ、ウィックフィールドの古くからの友人である。彼と彼の妻アニーの年齢が親子ほど離れ、しかも、彼女が美人で、彼女の若い従兄弟が彼女を密かに熱愛していることから、彼女と従兄弟との不倫疑惑がおこる。ここで興味深いのは、この疑惑を表沙汰にし、家族会議（これには関係者一同だけでなく、夫の知人たちが出席し、事の真偽を審議し、事態収拾策を決定する）を招集し、彼女に身の潔白の証明を要求するのが夫であるストロングでなく、彼の知人ウィックフィールドであることである。妻の振る舞いは夫の権威を揺るがす地雷であるだけでなく、夫の男性仲間との付き合い方法を問う試金石でもある。夫は友人を慎重に選び、妻はその友人を彼女自身の友人としなければ、結婚生活の円滑な運営は難しいということであろう。この作品では家庭とは外界から隔離されているように見えても、決して外から干渉されないわけではない。無干渉とは逆に、外からの規制は時の経過とともに強くなる。男性間の連帯意識が後に『エドウィン・ドルードの謎』（1870）にみられるような筋肉的キリスト教信奉や帝国主義的支配志向に発展することは想像に難くない。しかし、家庭の平和がヒーローの結婚という形で謳歌される『デイヴィッド・コパフィールド』では、男性側の組織的な検閲・規制を必要とする女性は周辺におかれている。

以上、デイヴィッドの二人の妻の奇妙な平和関係を中心に作品を分析し、『デイヴィッド・コパフィールド』における父権の変容・権威の拡散を明らかにした。デイヴィッドが自己確立の拠り所とする「家庭の平和」について見逃せないことは、1830年代40年代の法秩序の大変革により、女性だけでなく男性も家庭に囲い込まれたことであろう。家庭の平和のために沈黙するのは女性だけでなく、男性もまたしかりである。家庭とは何か。家族とは何か。この定義をめぐる論争は今日まで続いている。家庭イデオロギーを自己形成の基盤の一つにするデイヴィッドから家庭を放棄するピップへの道、また、アグネスあるいはドーラからレディ・イザベル

への道はそれほど遠くないのである。

テキスト： Charles Dickens. *The Personal History and Experience of David Copperfield*.  
London: Penguin Books, 1996 .

<注>

1. P.M. コーエンは『娘のジレンマ』においてセンセーション小説のような一族一家の没落・再興を題材にした小説においてさえ血筋や資産でなく、それらとは切り離された家族生活のパターンが親から子供へ継承されるという視座にたつ。しかし、彼女が主要作家としてとりあげるオースティン、エミリ・ブロンテ、ジョージ・エリオット等などの女性作家の作品は別として、父権の権威にこだわり続ける男性作家の作品を論じる場合、血筋や財産の相続は、やはり、無視すべきできない。
2. これについては拙稿「新しい時代の到来と父親支配の終焉 『ドンビー父子』を中心に」(『津田塾大学言語文化研究所報』15号、2000年12月)及び「『ドンビー父子』 中国への旅と新しい家族の誕生」(ディケンズ・フェロウシップ日本支部『年報』24号、2001年10月)を参照。
3. これについては拙稿「家族の復権 『イースト・リン』とその周辺」(『文学研究』28号、2001年3月)を参照。
4. デイヴィッドの物語にはミス・トロットウッドだけでなく、他の複数の「墮落した女性」(男性に誘惑され、捨てられた娘、売春婦、不倫疑惑がかけられた人妻等など)の女性体験が挿入される。これらが断片的だが、効果的に語られ、しかも、語り手デイヴィッドがしばしば女性名で呼ばれることから、これを K. レイノルズや N. ハンブルのように「女性の自叙伝」と呼ぶ批評家もいる[レイノルズ&ハンブル、157]。

引証文献

- Cohen, Paula Marantz. *The Daughter's Dilemma*. Michigan: Michigan Univ. Press, 1991.
- Disraeli, Benjamin. *Sybil*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1998.
- Gay, Peter. *The Bourgeois Experience II: The Tender Passion*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1986.
- Reynolds, Kimberley. & Humble, Nicola. *Victorian Heroines*. New York: New York Univ.

Press, 1993.

Sadrin, Anny. *Parentage and Inheritance in the Novels of Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1994.

Welsh, Alexander. *The City of Charles Dickens*. Oxford: Clarendon Press, 1971.